みんなちがって みんないい

～考えてみよう人権のこと～

わたしたちは、誰もがかけがえのない存在であり、
多様な個性と豊かな可能性を持っています
しかし、さまざまな人権の課題によって
それらを生かすことができていない現状があります
今回、人権に関するさまざまな取り組みを取材し、
誰もが自分らしく、いきいきと幸せに暮らしていくためには
何が大切なのか考えてみました

ワークショップデザイナー
髙﨑 恵さん

県内外で男女共同参画を始め、人権や多様性について「ワークショップ」という手法を使って、講座や研修を行っているワークショップデザイナーの髙﨑恵さんにお話を聞きました。

――ワークショップとはどういうものですか？

ワークショップとは、参加・体験をしながら人とのかかわりの中で学ぶことですね。進行役の私は一方的に教えるのではなく、参加者に気付きを促したり、参加者同士のコミュニケーションの場を作ったりします。1人で考えるのではなく、みんなで話や体験をしながら、その時のテーマについて一緒に考えてもらうという方法です。

――ワークショップで人権や男女共同参画について伝えようと思ったきっかけは？

私はワークショップデザイナーになる前は、ラジオ局やレコード会社などメディアの世界で働いていました。ラジオ局では、非正規雇用で仕事をしていました。そこでは「電話に出るのは女の人の仕事」のように働く場において、「男性の方が上で女性の方が下」みたいに、雑用は女性がする風潮がありました。そしてある日、私が電話対応をしているときに別な電話が鳴って、そこにいた男性社員に「電話鳴ってるよ、早く出て」って言われたんです。そういう出来事があって、ここでは女性は低く見られているんだなと強く感じました。その他にも、深夜番組では特に差別的な発言が「おもしろい」とされていることがあって、「おかしい」と思っても非正規雇用の立場では会議に出る機会もなく、私には発言の場がなかったです。その後、レコード会社から正社員の誘いがあって働くようになりました。そこでは、歌手のCDを放送局などへ宣伝する仕事をしていました。歌手の人たちは年間契約で、CDが売れないと契約を切られていました。でも、営業の私たちには何の責任も問われませんでした。私は何の痛みも伴わないのに、作り手側の歌手の契約が切られるのは「おかしい」と思いました。そういう出来事があって、働く自分を振り返ったときに、違和感や疑問を感じるのが、人権が大事にされていない場面で、私はそういうところにいたくなかったです。そう思った時に、自分の親が人権や男女共同参画についての大切さを伝える仕事をしていることを思い出して、私もやってみたいと思ったのがきっかけですね。

人権が大事にされていない場面で違和感や疑問を感じた

――各地で活動をしてみて、どういったことを感じますか？

各地を周る中で感じるのは、全国どこの地域でも抱えている課題は同じだなということです。特に共通しているのが「他の人と違ったら嫌だ」というところです。「ちがい」を恐れているというのは、どこの地域でも同じです。でもみんな思っていることを話したいんだなって感じます。ワークショップで発表してもらった時に、その発表に対して私が肯定的なコメントをすると、すごくうれしそうな顔をするんです。それくらい人は日常の中で認められていないんだと実感します。

――活動を通じて伝えたいことは何ですか？

この世に性別や生まれる順番を選んで生まれてきた人はいません。自分では変えることの難しい、自分では選ぶことのできない性別などの「属性」等によって進む道が決められることがあってはならないと思っています。人権や男女共同参画が大事だということをみんなで共有するために、参加者自身に気付いてもらうためのワークショップづくりをしています。意識が変わらないと仕組みは変わりません。そのためには「気付き」が大事だということです。

髙﨑さんは現在、県男女共同参画センターが主催する「子どもたちの男女共同参画学びの広場推進事業」で、事業コーディネーターとして県内各地の小・中学校でワークショップを行っています。

本市では昨年度、桜山中学校で、そして今年度は桜山小学校で同事業を実施しており、児童や保護者、教職員を対象に髙﨑さんによるワークショップを行いました。また、「まくらざきハーモニーフェスティバル」や市職員を対象とした男女共同参画研修会でも同様のワークショップを行いました。

では、どのようなワークショップが行われているのでしょうか。桜山小学校で実施された「子どもたちの男女共同参画学びの広場推進事業」の様子を紹介します。